

明日を創る医療総合誌

平成24年10月1日発行(毎月1回1日発行)  
昭和49年10月15日第三種郵便物認可

# C

# CLINIC

magazine

2012  
OCT  
10

## No. 520

[特集]

# インフルエンザ診療2012

座談会

## 2011-2012シーズンの ウイルス流行と治療効果

日本臨床内科医会インフルエンザ研究班

解説

## 抗インフルエンザ薬 最新治療戦略

東北大学加齢医学研究所  
抗感染症薬開発研究部門・教授 渡辺 彰氏

### 福島雅典のトーク&トーク

—新しい医学哲学の創生 特別編—

ゲスト 慶應義塾大学名誉教授 猿田享男氏  
「医療イノベーションは日本の大学連合から」

## 西洋医学と融合した日本漢方の国際的普及が一気に加速

### Point

意見・提言の骨子

- 西洋医学の原理で110年以上続いたICD（国際疾病分類）に初めて伝統医学が盛り込まれる計画。
- 西洋医学と漢方医学が補完しあうことで治未病を包括した複合的かつ精緻な治療が可能に。
- 漢方の公的な統計情報獲得によって、正しい漢方医学の普及が期待される。

### インフォメーション・パラドックスに陥っていたICDの統計情報に契機

WHOによる国際疾病分類(ICD)に、漢方を含む国際伝統医学分類(ICTM)が初めて盛り込まれる計画が順調に進んでいる。さまざまな伝統医学があるなか、2015年改訂予定のICD-11で、日本・中国・韓国を中心とした「東アジア伝統医学分類」の導入が予定されており、2012年5月のWHO総会后公開されたICD-11ベータ版 <http://apps.who.int/classifications/icd11/browse/f/en> の新しい章(23章)は伝統医学の内容になっている。

ICDは正式名称を「疾病及び関連保健問題の国際統計分類」といい、世界保健統計の基礎になっている。いままでは死因統計が主であったが、現在は疾病統計にまで使われていて、わが国でも包括診療(DPC)に活用されている。

WHOが伝統医学に関心を示す理由は、保健統計のインフォメーション・パラドックスが挙げられる。ICDは世界保健統計といいながら、実際には先進国のデータ

しか取れていない。伝統医学を取り込むことで、より多くの地域の医療情報が得られることになる。

ICTMの作成は、2005年にWHO西太平洋地域事務局が開始し、2010年からはWHO本部が推進している。日中韓の伝統医学は共通点とともに相違点もあり衝突もあったが、ICDに入れる、という大目的のためにお互いの立場を理解しながら協力し合ってここまでたどり着いた。

### 9割の医師が漢方薬を使用するも漢方の考え方は普及していない

ICD-11は2015年のWHO総会で承認される予定であるが、日本での運用は、西洋医学的病名(ICD)と漢方診断「証」のダブルコーディングを検討している。

西洋医学的病名が病理学的分類

であるのに対し、「証」は個人の体質や状態に対する分類。西洋医学と漢方医学は地球の経度と緯度の関係に似ていて、その交点が治療目標となる。つまり、西洋医学に漢方の考えを加えれば治療の精度は確実に向上する。

日本では9割の医師が日常診療に漢方薬を使用しているが、残念ながら漢方医学の考え方が十分取り入れられているとはいえない状況だ。漢方の特質を理解して、用いてこそ漢方薬の本当の良さが引き出せる。西洋薬と同列に、選択肢の1つとしてのみ漢方薬が使われているうちは漢方医学の本当の良さが引き出せないであろう。ICD改訂では、漢方の公的な分類方法が体系化されるため、漢方らしい使い方が広まると期待したい。

同時に国内を超えた漢方医学の国際的な展開も視野にある。漢方は「Kampo」として欧米で注目が高まっており、医療の質や製剤の評価もすこぶる高い。ICDへの導入によって漢方の普及が一気に加速することを期待している。

(談)



慶應義塾大学医学部准教授・漢方医学センター副センター長

### 渡辺賢治 (わたなべ・けんじ) 氏

慶應義塾大学医学部卒業。同大内科学教室、東海大学医学部免疫学教室を経てスタンフォード大学留学。帰国後、北里研究所東洋医学総合研究所を経て、現在に至る。日本東洋医学会副会長。